

角膜症に内皮細胞移植

京都府立医大 視力3人大幅回復

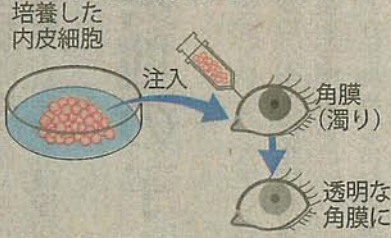
京都府立医科大の木下茂教授(眼科学)らの研究グループは12日、外傷などで角膜内皮が傷つき視力が低下する「水疱性角膜症」の患者の目に、シャーレで培養し

た他人の角膜内皮細胞を注射器で注入して移植する世界初の臨床研究を始めたこと発表した。移植を受けた3人の患者の視力は大幅に回復しているという。大がか

りな手術が必要な角膜移植に比べ患者の負担が少なく新たな治療法として期待されている。

研究グループによると、角膜内皮細胞は角膜の裏側

角膜内皮細胞移植のイメージ



にあり、角膜を透明に保つ働きをしている。水疱性角膜症は、手術や外傷などで

角膜内皮細胞が大幅に減少し角膜が濁って視力が低下する病気。国内に約1万人の患者がいるとされる。角膜内皮細胞は体内で再生されないため現在は角膜移植が唯一の治療法だが、角膜提供者が不足している。

研究グループはこれまでに、独自の方法でシャーレでヒトの角膜内皮細胞を培養して増やすことに成功。サルに移植し、内皮として定着することを確認した。

臨床研究では、米国から輸入した角膜内皮細胞を培養。昨年12月から今年2月にかけて、57〜68歳の男女3人の患者の目に移植した。手術前は0.05〜0.06だった視力が、0.1〜0.9まで回復しているという。

今後2年間で約30人に移植し効果を確認するという。

木下教授は「若い細胞を移植するので機能も長持ちする可能性がある」としている。